

服装における柄の配色と大きさの嗜好性

—女子大学生と母親世代の比較—

橋 本 令 子*

Preference of Patterned Combination of Color and Patterned Size by Clothes
—The Comparison of the Female University Students and the Mother Generation—

Reiko HASHIMOTO

1. はじめに

2003年の春夏以後、服装には10年ぶりにヤングからミセスまでエレガントな個性と明るさを求める心理が拡大したため、これまで閉塞感があったプリント柄が目立って活性化につながり、テキスタイル段階での期待も高い¹⁾といわれた。これを機にして、若い人たちの間では服やバッグなど柄物を身につけることが多くなってきた。また現在のファッションは様々なデザイン、柄、配色の服装が存在し、人々の嗜好も個性を生かした服装へと多様化している。

柄物の服装は無地物に比べ柄に興味の重点がおかれるため、着用者にとって柄の種類、配色、配置、柄の大小は、服装を選択する際の「似合う」「好き」「着たい」などと判断する大きな要因となり、色や柄の相互関係が重要となってくる。

これまで筆者は、柄と配色との関係を扱った研究²⁾を審美的な着装の観点から行ってきたが、それは固定化された資料について評価したものであり、着用者自身が自由に呈示した例ではなかった。

そこで今回はアパレルメーカーにおいて使用されている柄の配色や大きさ、配置を自由自在に変換できる4Dboxを使用し、女子学生とその母親世代を対象者にして各自が着たい、好きと評価する色と柄の大きさを4種の服種を用いてモニター上で作成することにした。そして世代ごとにふさわしいと考える柄の嗜好について検討した。

2. 実験方法

2-1 柄の選定

試料とする柄は、“TEXTILE DESIGNS ヨーロッパとアメリカのパターン200年”³⁾、“WORLD TEXTILE COLLECTION”⁴⁾を参考に、これまでに実際の服装柄として存在した

* 生活科学部 生活環境デザイン学科

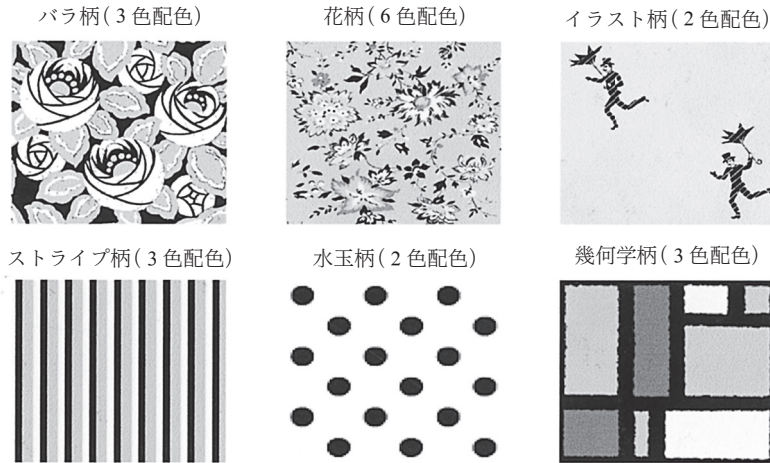


図1 試料柄

ものを選定した。柄の種類は図1に示すように、抽象花柄、具象花柄、イラスト柄、ストライプ柄、水玉柄、幾何学柄の6種類である。以後、抽象花柄はバラ柄、具象花柄は花柄と明記する。各柄の配色数は、花柄6色、幾何学柄4色、バラ柄とストライプ柄3色、水玉柄とイラスト柄2色である。

作成には4Dboxを使用した。ストライプ柄と水玉柄はHi print機能のストライプ編集パレット、水玉設計パレットを用いて作成した。バラ柄、花柄、幾何学柄、イラスト柄はスキャナーから読み込み1レポートだけ取り出して、配色数により色まとめ加工を行った。そして実験を行う際に色の影響を受けないよう、柄の配色はグレーの段階調に配した。

2-2 服種の選定

柄をのせる服種は、スカート、パンツ、ワンピース、ブラウスの4種類とした。これは服種の違いにより、着用したい好きな柄の大きさや配色は、異なる想定したためである。そして服装の形態は、ベーシックなデザイン性の強くないものとした。

試料作成は、身長160cmの標準体型のモデルが各服を着用し、これをデジタルカメラで写真撮影した。その際、首から足首までの全身写真と、服装を中心に拡大した2種類を写した。拡大写真はモニター上に服装を呈示した際、柄の配色や大きさをより明確にすることが必要であるため、全身の着装状態はより分かりやすく服装イメージを判断してもらうためである。

コンピュータに取り入れた画像はPhotoshopを使用して背景色をN7のグレーに設定した。次に、4Dboxを使用し着用している服の範囲を体の動きにあわせてパーツ（見頃、袖、パンツ部分等）ごとにメッシュをかけ、これを保存した。

2-3 実験内容

(1) 服装に関する嗜好性の調査

最初に、被服に関する嗜好性を問う調査を実施した。被験者は本学学生25名（年齢21

～22才)と学生の親世代である女性15名(年齢42～53才)である。

調査内容は「原色よりも、中間色の方が好きである」「大柄の模様よりも、小柄の模様の方が好きである」「服装には柄よりも、配色に重点を置く方だ」「ファッション雑誌によく目を通す」など、色や柄に関する質問や、ファッションに興味があるかどうかを問う質問19項目とした。回答は「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の5段階で判断した。そして最後に「着用したい服装色」を日本流行色協会発行 JCC40の色見本から3色選出した。

解析は単純集計を行い、各質問項目に対し女子学生と母親世代間に差があるかどうかを調べるため、t検定を行った。

(2) 柄の配色と大きさの嗜好性実験

実験は、試料として作成した4服種と6種の柄に、嗜好性の調査をした同被験者に対し着用したいと考える柄の配色と大きさを自由に決定してもらう。手順は図2のようである。

無彩色の柄に最初、柄と地の色を選択し配色を決める。被験者は日本色研配色体系PCCSの基本24色相とその間の1色を取り48色相をベースにし、明度と彩度を各23段階に展開した色見本10224色の中から選択する。柄の大きさは最初に呈示した大きさを100%とし、被験者の着用したい好みの大きさに応じて10～600%までの間で調節して決定する。配色、柄が加わったときに全体をみて変更することも可能である。これを実験者が聞き取り操作するが、実験にはかなりの時間を要するため、1回の実験時間は90分とし、日を変え数回にわけて全服種が終了するまで行った。

解析は世代間による配色関係、柄の大きさを調べるとともにトーンと色相、配色関係と大きさの関係について二元配置による分散分析を用い検討した。

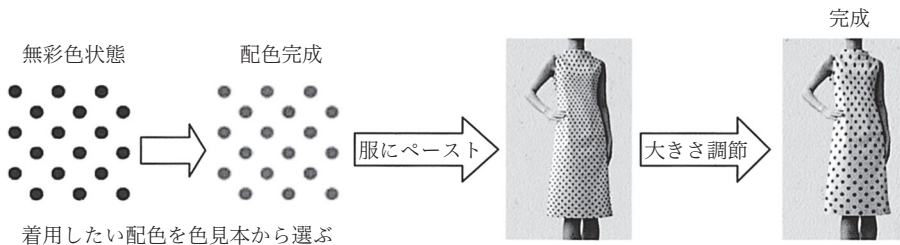


図2 実験手順

3. 実験結果及び考察

3-1 嗜好性の調査結果

質問19項目について学生と母親世代の平均値と両者間の差を調べるためt検定を行った。結果を図3に示す。5%の有意性が認められた項目は、問3, 5, 7, 11, 15である。この項目の内容を調べると図は省くが、問3は、具象柄を好む学生が12% (あてはまる, ややあてはまる含), 母親世代が46%を示し、柄の種類により着用したい服装が異なっていることがわかった。学生は若々しいイメージがする直線で描く幾何柄, 母親世代

は女性らしい落ち着いたイメージがある柄を好むようである。問5については、無地物を好む学生は16%、好まない学生は64%、母親世代は柄物を好む人が40%を示し、問3の結果からも納得できる。問7については、小柄の模様を好む学生が45%、母親世代は66%であり、母親世代は小柄の模様を好む傾向が強い。問11については、派手な色の服装を好む学生が8%、親世代が33%、反対に地味な色の服装を好む学生は80%、母親世代は40%である。問15については、ファッション雑誌をよくみるのは学生が64%、母親世代は41%であり、母親世代はファッション雑誌ではなく、買物やテレビなどから情報を得ているものと推察される。

また、3色選択した着用したい服装色については、両世代ともナチュラル系の無彩色の出現率が高い結果を示した。これは様々な色味の服装に対してコーディネートしやすいためと思われる。次いで学生はブラウン系、ピンク系、ブルー系、母親世代はパープル系、ブルー系、レッド系を選択している。これをトーン別にみると、学生はdk, ltトーンの暗い色や明るい色、母親世代はv, ltトーンの鮮やかな色や明るい色を好んでいる。これ

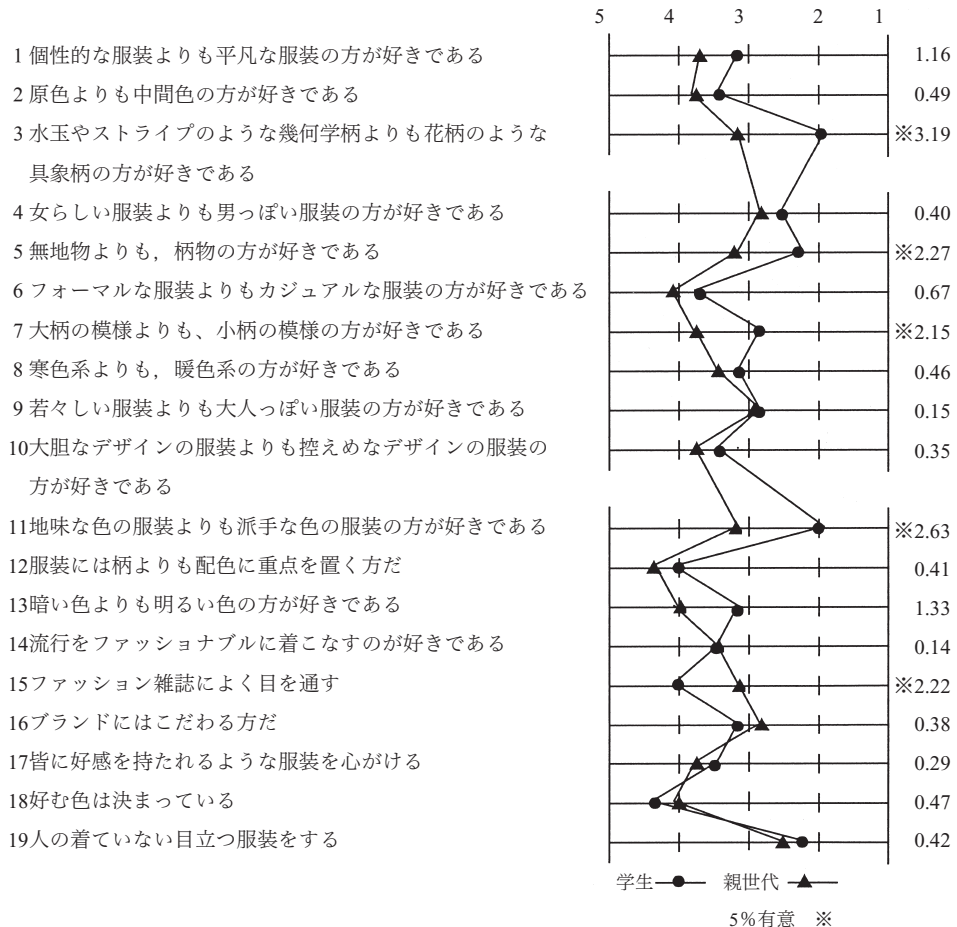


図3 服装に関する嗜好性調査の結果

は、学生が地味な色や暗い色を好み、母親世代は派手な色や明るい色を好むという問11の結果と一致した。以上、柄の種類、大きさ、色について両者間に差が認められた。

次に、服装上に呈示する色や柄の大きさが、調査回答のように具体的な形となってあらわれるかどうかを嗜好性の実験結果より検討した。

3-2 嗜好性の実験結果

実際に被験者が服装の配色、柄の大きさを考慮して作成した例を図4に示す。

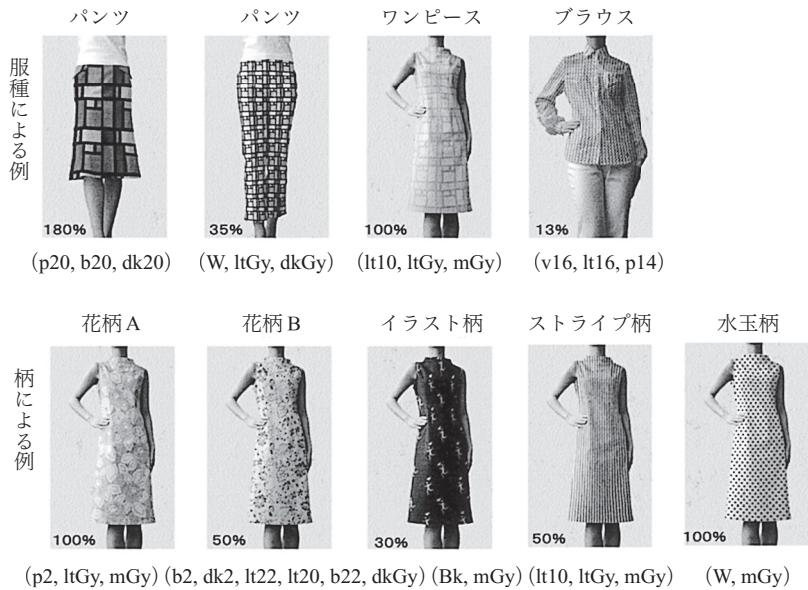


図4 柄の配色と大きさの選択例（学生）

(1) 着用色の嗜好傾向・色彩傾向

服種別に着用したい地色の色彩傾向を調べた結果を図5に示す。

色相についてみると学生は、4服種ともに白、黒の無彩色の選択率が高い。特にスカート、ワンピース、ブラウスは白、パンツは黒が顕著である。有彩色はスカートやパンツには橙系や青系、ワンピースが赤系や黄系、ブラウスは橙系の選択率が高く、緑系の選択率は低い。トーンは各服種ともにpトーンの選択率が高いことがわかる。

母親世代の色相は、学生と同様に各服種とも白の選択率が高く、次いでスカートは黒や青系、パンツは橙系、ワンピースは青紫、ブラウスは青から紫の選択率が高い。トーンもpトーンの選択率が高く、中でもブラウスにおいては際立っている。

図の部分となる柄の色について調べた。これを図6に示す。色相については学生、母親世代とも赤系から黄みの橙、黄系と青系の選択率が高く、暖色、寒色の色相が選択された。しかしトーンについては、服種における特徴的な違いは認められないが、学生はpトーン、ltトーンの選択率が高く、母親世代はb, lt, p, ltgなど全体に幅広くトーンを選択している様子が伺える。母親世代は自分が着用したい、好きな色が個々にはっきりして

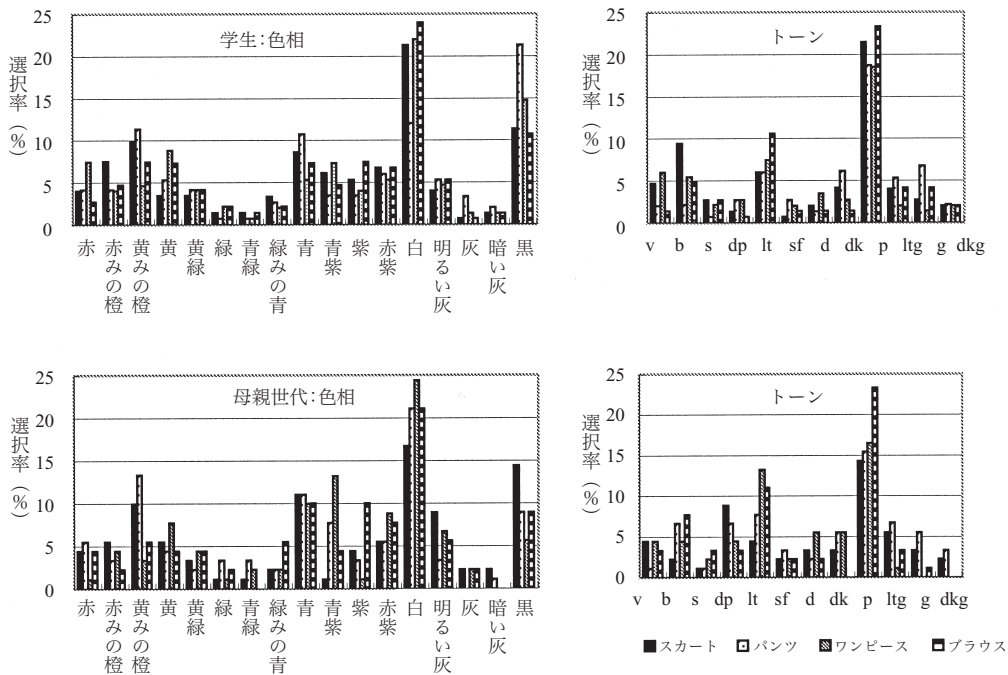


図5 地色の色彩傾向 (服種別)

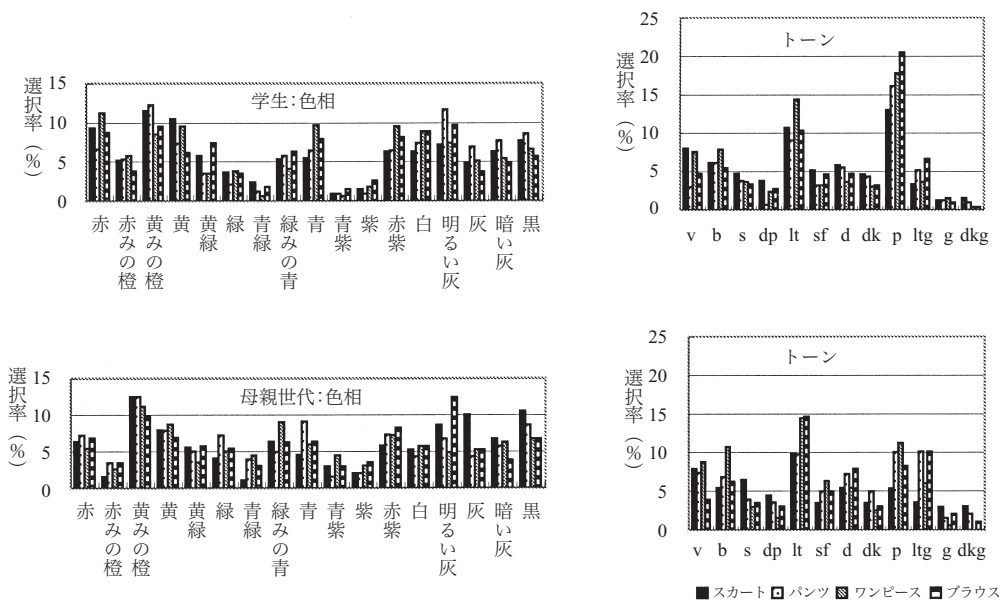


図6 柄 (図) の色彩傾向

いるものと考えられる。

さらに地色と柄の色との配色関係について検討した結果、学生は有彩色と無彩色の組み合わせが各服種において50%以上あり、有彩色と有彩色の組み合わせは30%前後、無彩色同士の組み合わせは15%前後となり、図5、6からも推察できる。母親世代についても、同様の傾向がみられた。

これより有彩色と無彩色の組み合わせが多数であったため、白と赤の配色は対照色と対照トーン、白とピンクの配色は対照色と類似トーンの組み合わせと考え、色相とトーンの種類を調べた。図は省略したが、学生は4服種ともに対照色と対照トーンの組み合わせが多い。しかし母親世代は、スカートが無彩色同士、ワンピースが同系色と対照トーン、パンツやブラウスが類似色と類似トーンの組み合わせが多く、服種によって特徴が認められ、学生のように画一化されていない。学生が母親世代に比べ対照色と対照トーンが多い理由として、学生は年齢が若いため色相差やトーン差を付けることにより、濃淡、強弱、明暗といった視覚的に感情を刺激するような配色を嗜好しているものと考えられる。反対に母親世代は学生ほど刺激的ではなく、上衣、下衣といった服装の特徴をつかみ全体を無難にまとめようとする傾向があるものと考えられる。

服装柄として色相とトーンのどちらが影響を及ぼしているかを検討するため、トーンはvとs、bとsf、dpとdk、pとlt、ltgとg、dとdkgをあわせ6トーンとして、色相は赤、赤みの橙と黄みの橙、黄、黄緑、緑、青緑と緑みの青、青、青紫と紫、赤紫を合わせ9色相として世代別に二元配置による分散分析を行った。その結果、学生はトーンが $F = 12.2$ 、色相が $F = 4.28$ で両者ともに1%の有意な差が確認された。同様に母親世代もトーンが $F = 7.52$ で1%、色相が $F = 2.38$ で5%の有意な差が確認され、トーンと色相のどちらにも影響していることが明らかとなった。

(2) 着用柄の大きさ傾向

柄の大きさについては柄の種類、服種別に世代間の差を検討するため、大きさを0～50%、50～100%と50%ごとに分けてt検定を行った。その結果、服種別においては両者間に有意差が認められなかったが、柄別においてストライプは t 値=2.51、水玉柄は t 値=3.43、幾何学柄は t 値=3.05であり、5%の有意差が認められた。しかしバラ柄、花柄、イラスト柄については有意差が認められなかった。

そこで、有意差がないバラ柄と有意差がある幾何学柄の例を図7に示した。バラ柄について学生は、スカートが61～100%、パンツ、ワンピースが41～100%、ブラウスが1～20%、81～100%の大きさを最適とし、母親世代は、スカートが61～80%、パンツは81～100%、ワンピースは61～80%、ブラウスは21～80%の大きさを最適としている。このように両世代ともに、各服種が100%以下の大きさが良いとしている。特にブラウスにおいては20%までの小柄を選択していることがわかる。

これは、ブラウスが上衣に着用することを考慮して柄を大きくすると他人に与える印象が強すぎるため、柄を小さくする傾向があるものと推察される。また、学生は具象柄を好まないという調査結果から、柄を小さくする傾向がみられたものと考えられる。

幾何学柄については、学生はスカートが100～200%、パンツが61～80%、ワンピースが81～150%、ブラウスが1～20%の大きさ柄を選択している。母親世代は、スカートは

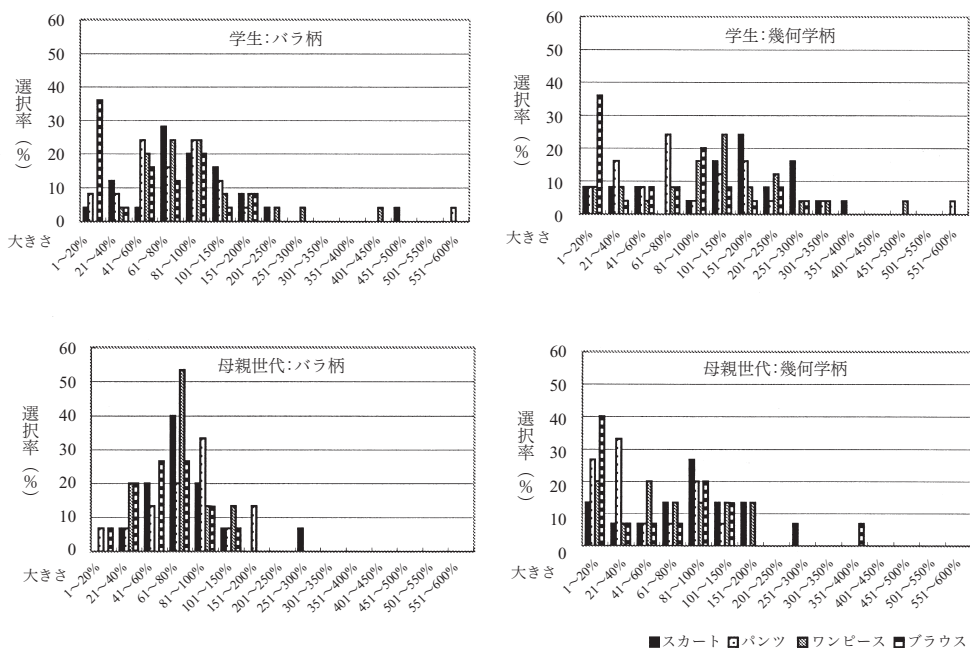


図7 柄の大きさ傾向

81~100%, パンツは1~40%, ワンピースは1~20%と41~60%, ブラウスは1~20%の大きさを選択している。両世代ともに、ブラウスは1~20%の大きさが適切としているが、スカート、パンツに関しては母親世代よりも学生の方が大きい柄を好んでいる。

その他に、イラスト柄は両世代とも1~60%の大きさが最適としている。これも柄自体のインパクトが強いため、柄を小さくすることで柄のイメージを抑えていると思われる。

以上、全体的にブラウスは両世代とも他の服種に比べ小柄を嗜好する。また、水玉柄、幾何学柄、ストライプ柄は、学生が母親世代よりも大きな柄を好む傾向が強い。これは服種によって好む大きさが変化するというよりも、嗜好する柄の種類によって柄の大きさが変化すると言える。しかし母親世代は柄の大きさに対しばらつきがみられたことから、服種の違い、さらに年齢、体型などを考慮して柄の大きさを決めているものと示唆された。

3-3 嗜好性調査と嗜好性実験との比較

嗜好調査において両世代間に相違がみられた点について、実際に判断した実験結果との比較を行った。

色彩は両世代とも色相、トーンの影響が認められ、様々な色を選択しているが、調査において学生は暗い色、母親世代は明るい色を好んでおり、やや違いが生じた。

柄については学生が幾何学柄において大柄を好み、花柄においては小柄を好む様子を呈し、具象柄より幾何学柄の方が好きであることが認められた。これは嗜好性調査からも学生は幾何学柄を好んでいると回答した結果と一致しており、柄を大きくしても抵抗なく自分自身の好みが反映されると考えていることがわかった。また母親世代は小柄を好む傾向が認められた。

4. まとめ

着装者が「好き」「着たい」と考える服装の色彩と柄の大きさについて、学生とその母親世代に対し嗜好性調査と実験を行った結果は、次のようである。

学生は柄物よりも無地物を好み、柄物の中では具象柄よりも幾何学柄を好む。しかし母親世代は柄物を好み、幾何学柄よりも具象柄を好む傾向がある。

両世代とも水玉柄やストライプ柄のような幾何学柄は無彩色同士の配色が選択されるが、具象柄には色味が加わり有彩色と無彩色、有彩色同士の配色が選択される。また、具象柄は使用するモチーフにより柄自体が持っている本質やイメージに影響されて色彩が決定される場合が多い。

配色関係について調べたところ、学生は対照色と対照トーンの組み合わせが多いのに対し、母親世代はスカートは無彩色同士、ワンピースは同系色と対照トーン、パンツやブラウスは類似色と類似トーンの組み合わせが多く、服種によってばらつきがみられた。学生は視覚的により感情を刺激するような配色を嗜好し、母親世代は全体を無難にまとめようとする傾向があることが確認できた。また、選択された色について色相とトーンの影響を検討したところ、両世代ともに色相、トーンの両者の影響が認められた。

柄の大きさについては、両世代ともに具象柄は小柄にまとめようとしており、特にブラウスに対し顕著であった。幾何学柄については、学生が母親世代よりも大きな柄を好む傾向がみられた。これは学生が服種の変化よりも、自分が嗜好する柄の種類によって大きさを変化させる傾向が強いのに対し、母親世代は服種や年齢、体型などを想定して柄の大きさを決める傾向があると示唆された。これまで色や柄を一定にして行った研究では色の影響が大であったが、今回のように自由に着用したい、好きな柄の大きさを設定することにより、柄の影響を確かめることができた。

最近では、4Dboxなどを使用して自分でデザインした柄を実際の布にプリントできる機械もあり、今回のように着装者自身が自由に色彩や柄や大きさを決定して制作することができれば、もっと個性あるおしゃれを楽しむことができるであろう。

参考文献

- 1) 織研新聞, 平成3年4月
- 2) 橋本令子: 被服の模様と色彩の変化によるイメージ効果——平面と立体状態の比較—— 相山女学園大学研究論集, 第31号, 自然科学篇 (2000年3月)
- 3) TEXTIL DESIGNS~ヨーロッパとアメリカのパターン200年~, スーザンメラ著, 同朋社出版 (1991)
- 4) WORLD TEXTILE COLLECTIONS casual geometric, 京都書院 (1995)